

聖書：マタイ 24：1～14

説教題：福音は全世界に宣べ伝えられ

日時：2020年5月24日（朝拝）

イエス様はこの24章で、エルサレムの宮を出て行かれます。前回見ましたように、23章39節をもってイエス様の公の場における宣教は終わりました。この後に記されるのは、プライベートな場での弟子たちへの教えです。そのことが24章、25章と記されます。そしてその後、26章は逮捕、27章はいよいよ十字架へと進んで行くこととなります。

さてイエス様は前回、エルサレムへのさばきについて語られました。23章37節で「エルサレム、エルサレム」と嘆かれ、38節で「見よ。おまえたちの家は、荒れ果てたまま見捨てられる」と言われました。これは直接的にはエルサレム神殿の崩壊を意味しました。これを受けて今日の箇所です。弟子たちがイエス様に宮の建物を指し示したのだと思われます。平行記事のマルコの福音書13章1節には、弟子たちがこのように言ったと書かれています。「先生、ご覧ください。なんとすばらしい石、なんとすばらしい建物でしょう。」 彼らはエルサレム神殿崩壊を意味するイエス様の言葉を聞きましたが、それは彼らにとってとても信じられないことでした。このように立派で壮麗なエルサレムの宮が崩され、荒廃させられることなどあり得るのだろうか。そこで彼らはこの建物は何と素晴らしいことでしょうかとイエス様に語ったのだと思います。何らかの意味でのイエス様の同意、また肯定的な答えを期待して。ところがイエス様の答えは違いました。原文では2節の最初に「しかし」という言葉があります。弟子たちの期待に反して、2節は「しかし、イエスは弟子たちに言われた」と記しているわけです。イエス様はそこで「あなたがたはこれらの物すべてを見ているのですか」と言われ、「ここで、どの石も崩されずに、ほかの石の上に残ることは決してありません。」と言われました。しかも「まことに、あなたがたに言います」と、重大な真理を語る際に使って来たフレーズを用いて。ですからエルサレム神殿が滅ぶことは確実なのです。しかもそれは完全に崩されると言われます。衝撃的な言葉です。そこで弟子たちがさらに問うた内容が3節にあります。彼らはひそかにみもとに来て言いました。「お話しください。いつ、そのようなことが起こるのですか。あなたが来られ、世が終わる時のしるしは、どのようなものですか。」 ここから分かることは、弟子たちはエルサレム神殿崩壊とこの世の終わり、またイエス様の来臨は密接につながっていると理解していたことです。彼らにとつ

て神の臨在の象徴であるエルサレム神殿の崩壊は信じられないことでした。しかしもしそのことが起こるなら、それはこの世の終わりトセットであるに違いない。そしてこの世の終わりとは単にこの世界が滅亡してすべてがなくなるという意味ではなく、今のこの世界の在り方がさばかれて、それに代わって神の御心に全くかなう新しい世界が始まることです。そしてその新しい世界のまことの王としてイエス様が来るということです。それは一体いつ起こることなのでしょう、またその前兆はどのようなものなのでしょう。そのように彼らは問いました。これに対してイエス様が答えられたのがこれから見る 24～25 章です。ここはオリーブ山にすわって教えられた教えて、オリーブ山講話と呼ばれたりします。今日の箇所を三つに分けて見て行きたいと思います。

まず第一に見たいことは、「人に惑わされないように気をつけなさい」というイエス様のお言葉です。5 節に、私こそキリストだ！私こそ救世主だ！と主張する偽キリストが多く現れ、多くの人を惑わすこと、6 節には戦争や戦争のうわさを聞くこと、7 節前半にも「民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がる」といった国家間・民族間の対立や紛争が生じること、そして 7 節後半にはあちこちで飢饉や地震が起こることが述べられています。ともすると多くの人々は、このような現象を前にして、世の終わりがいよいよ近いのではないかと慌てふためきやすい。今日の私たちもそうだと思います。東日本大震災をはじめとして様々な自然災害が私たちの生活に影響を与えています。次は南海トラフか、首都直下かと恐れられています。また国家間の対立、緊張状態も経験しています。北朝鮮の弾道ミサイルが頻繁に発射され、J アラートなる不気味な警報音を聞かされ、ミサイルが飛んで来た時のためにどう備えるかという映像等を見せられて、この世界は次の瞬間にどうなることかと不安に思った方も多いのではないのでしょうか。そしてまさに今、私たちはコロナウイルス問題の渦中にあります。ようやく感染者数が減少して来ましたが、数週間前は日ごとに感染者数が増え、全世界に蔓延し、世界中がパニックになりそうだった。しかしイエス様はここで、「人に惑わされないように気をつけなさい」と言っています。「気をつけて、うろたえないようにしなさい」と。そして 6 節で「まだ終わりではありません」とはっきり仰っています。つまり今触れて来た事柄は、この世の終わりの直前のしるしではないと言っています。そういうことは必ず起こることであって、まだ終わりが来たのではないと。

ここに示されていることは何でしょう。それは神が全てを御手に収めてコントロールしておられるということです。悪いことが次々に起こると、私たちは得体の知れない悪

の力にこの世界はコントロールされてしまっているのではないかと、もう手に負えない状態になっていて、さらに絶望的な状態に連れて行かれるだけではないかと恐れます。しかしそうではないのです。ここに示されていることは神が一切を支配しておられるということです。神は全部を分かっている。神は慌てていない。この視点を持つ時、私たちはうろたえることから守られるのです。

イエス様は「そういうことは必ず起こります」とここで言っていますが、なぜそうなのでしょう。それは一言で言えば、この世界は神の前に罪を犯した世界だからです。この世界は本来神が造られた良い世界でしたが、人間が罪を犯したため、その呪いとして様々な痛みや不調和が入って来ました。神との正しい関係に立ち返らない限り、この世は壊れて行く方向に進みます。人と人との関係もそうですし、人と自然との関係もそうです。それらは世の終わり直前のしるしではありませんが、この世には当然起こること、そしてこれから益々起こることです。

そんな中、8節に注目すべき表現があります。それは「これらはすべて産みの苦しみの始まりなのです」という言葉です。これは今は苦しい中にあるが、その先には希望があるということです。赤ちゃんを出産する母親は、その前に産みの痛みというプロセスを通って行かなければなりません。しかし行く先に新しいいのちの誕生という素晴らしい祝福が待っているのです、それまでのプロセスを耐えるのです。私たちの行く先にある希望とは何でしょうか。それは完全な神の救いの世界が来ることです。待ち望んだ救いの世界が完成することです。ですから私たちは人々が世の終わりが来たと言ってうろたえ、右往左往する時、一緒になって恐れるのではないのです。私たちもおお苦しみ、周りの方々と共に助け合い、平和に生きるように努めますが、それでも起こって来る様々な戦争、自然災害、偽キリストの出現などは、より良い世界が来るための産みの苦しみの始まりなのです。私たちは逆にこのことゆえに、先に置かれているものに高く目を上げて希望を大きくする歩みをするようにと導かれています。

2つ目のポイントとして見たいのは9～13節です。ここにこの時期はクリスチャンが試される期間であることが述べられています。9節には人々から迫害されることが言われています。何かをしたからではなく、「わたしの名のために」、すなわちキリスト者であるためにということです。この世はイエス様を十字架に付けた世ですから、そんな世で私はキリストに付くと公言するなら、世からの迫害を免れることはできないことを聖

書は繰り返して述べています。それは世の終わりに向かって益々激しくなります。そんな困難の中で、10 節に書いてあることが起こって来ます。ここで言われているのは基本的に主の弟子たちのことであると考えられます。人々から苦しめられ、憎まれる困難の中で、つまずいて信仰の道を行くことをやめる人が出て来るのです。また裏切る人が出て来る。困難を逃れるため、世や世の権力者の側に付いて、クリスチャンを見捨てる人たちが出て来る。さらに憎み合う状態が教会の中に生じる。さらに 11 節にあるように偽預言者が大勢現れて、多くの人を惑わす。新約聖書には実際に 1 世紀において多くの偽教師が出て来たことが記されていますし、歴史の中でも異端と呼ばれる教えは沢山出て来ました。同じキリスト教と言えるのかと思われるような様々な団体や活動も今日あります。そして 12 節に「不法」がはびこるとあります。すなわち神の律法、教えを無視して生きる人たち。また多くの人の愛が冷えるとあります。これは世の中一般にも当てはまることかもしれませんが、特にここで焦点が当てられているのは主の弟子たちの間ということです。「愛」は、前に 22 章 34~40 節で見ましたように、一番重要な戒めです。主に従う者たちのトレードマークとなるべきものです。ところが 10 節で見たように、困難の中で人々は互いに裏切り、憎み合い、この大事な「愛」を捨てるようになる。兄弟姉妹であった者たちの間にも愛が冷えるというショッキングなことが起こるのです。

しかし、そういう中で「最後まで耐え忍ぶ人は救われる」と 13 節にあります。他の箇所と同様、ここにもはっきり示されている真理は、本物の信仰は最後まで耐え忍ぶ信仰であるということです。生涯保ち続ける信仰であるということです。言い換えれば一時的な信仰はダメであるということです。そのことはあの種蒔きのたとえからも明らかです。岩地に蒔かれた種や、茨の中に蒔かれた種は、最初はある種の応答をして芽を出しましたが、やがて困難やこの世の思い煩いによって、信仰が窒息し、枯れてしまう。つまりそれは本当の信仰ではなかった。名目だけのクリスチャンであったということです。今日の箇所で言われていることは、世の終わりに向かう困難な状況の中で主の弟子はふるわれるということです。表面的な人、名ばかりの人は困難の中で信仰を捨てる。周りのこの世に同調する方向へ進む。そういう中で最後まで耐え忍ぶ人こそ真の救いにあずかる人なのです。

これはもちろん人間的な力で我慢するというものではありません。最後まで耐え忍ぶとは、この文脈の言葉で言えば、多くの人がつまづく中でつまづかないことです。人々

が裏切ったり、憎み合ったり、愛が冷える中でも、愛に生き続けることです。どうしたら私たちは「愛」に生き続けることができるのでしょうか。それは以前にも見ましたように、神の愛にとどまることによってです。神の愛を豊かに受けてこそ、自分自身が愛に生きることが私たちに可能になります。ですから「最後まで耐え忍ぶ歩み」は神の力によって初めてできることということになります。私たちは世の終わりに向かって自分自身に注意しなければなりません。周りにはがっかりする状況が起きて来ます。愛が冷える状況が生じて来ます。その中で神と真実につながり、愛に生き続けること。そうする人が最後まで耐え忍ぶ人です。そしてその人が救われるのです。このことが私たちの課題です。

最後3つ目のポイントとして注目したいのは14節です。ここまで否定的なことが多く語られた中、ここには肯定的なこと、より積極的なことが述べられています。これまで読んで来た流れに従えば世界にはだんだん困難なことが多くなり、信仰者の生活にも残念な事態が生じて、信じる者たちの共同体はどんどん弱くなり、しばむだけのように思われたかもしれません。しかし、そうではない！ということがここに言われています。この迫害と困難のただ中で「御国のこの福音は全世界に宣べ伝えられ、すべての民族に証しされる」とあります。この時、福音はまだユダヤ人に差し向けられているだけでしたが、それは間もなく全世界のあらゆる人々に向けられるようになることをこの言葉は示しています。世の終わりに向かって、この世界の上には罪の影響と力が益々大きく働き、あらゆるものを破壊する方向へ導いて行きますが、一方では神が福音を全世界に差し出し、多くの人々がこれに聞くことができる機会を広く提供して行かれる。神がそう導かれるのです。そうしてすべての民族に証しされてから、終わりが来ると言われています。

これは6節の表現と対照的です。6節では戦争などが起こるが、終わりはまだだと言われました。これが起こったらもう世の終わりではないか、と人々が考えるものを取り上げて、「そうではない。まだである。」と言われました。それに対して14節では、これがなされたら終わりが来る！と言っています。つまり世の終わりを考えるなら、私たちが注目すべきはこの「全世界への福音宣教」「すべての民族への証し」であるということです。世の終わりとは特別な関係を持っているのはこのことであると言われているのです。

しかしこれは世界宣教の進展具合を調べることによって、いつ終わりの日が来るか、大体の予想が付けられるという意味ではありません。世界にどれくらいの民族があるかを調べて、まだ伝えられていない民族が残っているから主の再臨はまだしばらく来ないだろうとか、あるいはもうそろそろのようだとと言えるということではありません。この新約聖書が書かれた当時、世界と言えば、それはいわゆる地中海世界でした。パウロはローマ書で西の果てスペインまでの宣教を志している旨、述べましたが、同時に 10 章 18 節で、キリストのことばは「世界の果てまで届いた」とすでに言っていました。また今日は当時に比べれば明らかに全世界的に福音が伝えられています。世界の宗教人口で一番多いのはキリスト教です。全世界が福音を聞いたと言える状況かもしれません。でもまだ福音を聞いていない人たちがいるとある人たちは言います。確かにそうです。しかしこの 14 節は全員が福音を聞くとは言っていないし、またすべての人が信じるようになるとも言っていない。そういう意味で私たちが単純に人間的にデータを取ることによって判断できることではありません。ただまだ終わりが来ていないということは、14 節の課題は神のご計画においてまだ最終地点まで到達していないことを意味していることは明らかです。私たちはこの御心を受け止めて取り組むのです。御国の福音が全世界に宣べ伝えられ、すべての民族に証しされるように、と。「証し」とは神がキリストにおいてしてくださったことを証言することです。神が一人子を遣わし、その方を私たちの身代わりに十字架に付けてくださったこと、その方を神が与えてくださった救い主と信じてより頼むなら、私たちの罪は神の前ですべて赦され、神に受け入れられ、神の子どもとされ、永遠のいのちを得る者とされる。そのことを言葉とともに行いをもって証しするのです。神との生ける交わりに生き、愛に生きることによって証しするのです。この私たちの取り組みこそ、終わりの日と大いに関係することなのです。神はこのことを十分に導かれて後、終わりを来たさせます。ですからこの御心を受け止めて、全世界への福音宣教に心と体を用いることこそ、この時代を特徴づけるものとなるべきことではないでしょうか。またこのような生き方こそ、かの日に向かって大きな意味と意義を持つ生き方なのではないでしょうか。

オリーブ山講話はなお続きます。今日の箇所では私たちは三つのことを学びました。一つは世の終わりのしるしではないかと人々がうろたえる状況の中でも、私たちは慌てないということです。それらはまだ産みの苦しみの始まりにしか過ぎません。神はすべてのことの上に計画を持ち、力強い摂理の御手を持って導いておられます。二つ目に私たちの課題は、この困難を深める時代で恵みに生き続けることです。愛が冷える中、主と

の交わりを通して最後まで耐え忍ぶ歩みをすること。そして三つ目に福音を伝える働きに参加することです。世界は暗いことが多くなる一方で終わりを迎えるのではありません。神は、福音が全世界に宣べ伝えられ、すべての民族に証しされてから、終わりの日を導かれます。神は今日もなお多くの人々が救いに入ることを御心として福音を差し出し、恵みの御手を拵げておられます。この神のお心を受け止め、神を賛美して、この神の働きのために自らの身を投じる者とされて行きたいと思います。この神のご計画は十分に成し遂げられ、そのゴールに達してから終わりが来ます。この神の力強い約束に励まされて、神と心をついにし、この素晴らしい働きのために祈り、仕え、用いられて行く幸いに歩んで行きたいと思います。